

# 楠木正行雜抄

水野恭一郎

## 一

楠木正行の動靜を、確實な史料の上で見ることができるのは、南朝の延元五年（一三四〇、四月二十八日改元して興國元年、北朝暦応三年）から、正平三年（一三四八、北朝貞和四年）に至る九年間である。この時期は、後醍醐天皇が延元四年八月十六日吉野の皇居で崩御され、皇子義良親王が、わずか十二歳で南朝第二代後村上天皇として皇位を継いだ治世のはじめのときであつて、南朝側にとっては、この幼い新帝を守つて、北朝・幕府側に対抗すべき重大な時期であつた。この重要な時期に、南朝皇居の地大和吉野の前面を守る畿内南朝勢力の最も中心的役割を果たした存在が、楠木正行およびその一統たちであつたといつてよい。南北朝五十余年の歴史のうちで、後村上天皇の時代は、南朝勢力が最も活発な活動を展開した時期であつたが、そのはじめの十年間、南朝勢力の中心として、爾後の南朝勢力活動の基盤を固めたとも評価さるべき楠木正行の動靜について、ここに若干の究明を進めてみたい。

楠木正行の名が、文献の上にはじめてあらわれてくるのは、延元元年（一三三六）である。この年、後醍醐天皇の建武政権から離反し、一度敗れて九州まで退いていた足利尊氏が、再挙して京都への進攻をはじめたのを迎え討つた

めに、正行の父正成が、勅命を拝して京都から兵庫へ出陣した。このときの事を伝える『太平記』の記事に、正成が出陣の途次、摂津国桜井宿において、嫡子正行に後事を托し、楠木氏の本国河内の東条へ帰還せしめたことの伝えは、著聞するところであるが、『太平記』に見えるこのくだりの記事が、正行の名の文献上の初見である。そして、この場面の記事には、「嫡子正行が今年十一歳ニテ供シタリケルヲ、思フ様有トテ、桜井ノ宿ヨリ河内へ返シ遣ス」と記されて、この年、正行は十一歳であったとしている。また、その後、父正成が五月二十五日兵庫の湊川合戦で討死をとげ、その首級が尊氏から河内東条の正行の館へ送られたことを伝えたくだりの『太平記』の記事にも、「今年十一歳ニ成ケル(正行)帶刀、父ガ頭ノ生タリシ時ニモ似ヌ有様、母ガ歎ノセン方モナゲナル様ヲ見テ」と、やはり十一歳として

いる。ところが、同じ『太平記』の記事の中で、後年、正平二年（一三四七、北朝貞和三年）の暮に、正行が四条繩手への出陣に先立って吉野の皇居へ参上したことを記している箇所<sup>⑤</sup>で、父正成の先年湊川での討死のことを後村上天皇に奏上しているくだりでは、「遂ニ摂州湊河ニシテ討死仕候了、其時、正行十三歳ニ罷成候シヲ、合戦ノ場ヘハ伴ハデ河内へ帰シ、死残候ハンズル一族ヲ扶持シ、朝敵ヲ亡シ、君ヲ御代ニ即進セヨト、申置テ死テ候」とあって、延元元年父正成討死の年に、正行は十三歳であったとしており、同じ『太平記』の記事の中で、正行の年齢が前後相違している。なおまた『太平記』巻二十五の「藤井寺合戦事」の条では、「光陰過安ケレバ、年積テ正行已ニ二十五、今年ハ殊更父ガ十三年ノ遠忌ニ当リシカバ」と記しているが、この藤井寺合戦を『太平記』は正平三年八月のこととして記述しているが、この合戦は、正しくは正平二年九月であつて、『太平記』は合戦の年を一年誤っている。この誤りは、当然また更に、藤井寺合戦につづく翌年正月の、四条繩手合戦の年にも及んで、「貞和五年正月五日、四条繩手合戦ニ、和田・楠ガ一族皆亡ビテ」と記し、正平三年（北朝貞和四年）正月の四条繩手の合戦を、貞和五年とする大きな誤りをおかしている。このあたりの『太平記』の年記には、このような誤りがあるが、正成の十三回忌に当る年は正

平三年であるから、『太平記』が記すように正平三年に正行が二十五歳であったとすれば、父討死の年、延元元年には十三歳であったことが正しいことになる。

また今日残されている古文書の上で、正行の名を初めて見ることができるのは、河内の観心寺の所藏文書の中に、河内国小高瀬領家職、為御祈禱料所、観心寺可令知行由事、去二月廿三日繪旨如此、早可被沙汰居当所候也、仍執達如件、

延元五年四月廿六日

(楠木正行)  
左衛門尉(花押)

跡部左近将監殿

とみえているもので、この文書は、文中に記されている同年二月二十三日付の後村上天皇の繪旨の仰せをうけて、正行が、河内の国守として、これを施行した国宣であるとみてよい。従って、この文書からうかがわれることは、この年、延元五年(北朝暦応三年)には、正行は、南朝の後村上天皇から、すでに左衛門尉に任ぜられ、また亡父正成の跡をうけて河内守にも補せられていたことが明らかである。延元元年十一歳とすれば、同五年は十五歳、延元元年十三歳とすれば、同五年は十七歳であるが、左衛門尉・河内守という官職からしても、この年十五歳はやや早い感があり、十七歳であることが妥当のように思われる。この点から推察しても、『太平記』の兩様の記述のうち、延元元年父正成が討死したときの正行の年齢は、十三歳であったとする記述の方が、事実に近いとみてよいのである。もし、そうであれば、正行の誕生は正中元年(一二三四)、いわゆる「正中の変」の起った年ということになる。

楠木氏の本貫地である河内の東条というのは、南河内の石川郡の内で、大和川上流の石川が、富田林の北方で二つに分岐して、西側の石川の主流を西条川ともいうに對して、東側の、金剛山に源を発する流れを東条川といい、この東条川流域の峡谷で、現在の行政区画では大阪府南河内郡の千早赤阪村から河南町にかけての地域である。また、この東条川の流域だけでなく、更に広く、その西方、同じく石川の分流で、西条川と東条川の間、谷間を流れる佐備

川の流域一帯<sup>①</sup>をも合せて、河内東条と呼んでいることもあるようである。この河内東条は、東方と南方は葛城・金剛の峻険な山岳地帯を背にし、西は佐備川と石川本流の間の嶽山・金胎寺山の丘陵地に囲まれ、北方のみが石川下流の古市地方を経て、大和川流域の河内・和泉の平野に開けている、正に要害の地であつた。しかも東条川を上流に溯れば、金剛山の南方の久留野峠・千早峠・大沢峠などを経て、比較的容易に大和の五条から吉野郡へ通ずることができ、金剛山北方の水越峠を越えれば、同じく大和の南葛城郡御所の南方から、また容易に吉野山に達することができた。更にまた、石川上流の天見川を溯つて、南方の紀見峠を越えれば、直ちに紀伊の橋本に至り、高野山に通ずることもでき、大和吉野山・紀伊高野山地方から河内に入るには、河内東条は、その重要な通路を占めていたのである。そしてまた、この河内東条から、葛城・信貴・生駒の連山の西麓を、真北に向つて北上すれば、中河内・北河内を経て、京都に至る主要な道筋にも當つていた。

## 二

正行の父正成が湊川で討死をとげたのち、入京の足利勢を避けて叡山へ行幸された後醍醐天皇が、一時足利方の和議を受諾して京都へ還幸、やがて足利尊氏の擁立する持明院統の光明天皇に譲位したのは、延元元年十一月で、ここ以後醍醐天皇の建武政権は互解して、足利氏の武家政権が成立することになるのであるが、後醍醐天皇は、延元元年も暮に近づいた十二月二十一日の夜、ひそかに京都の花山院の御所を脱出して、大和の吉野に遷幸される。このときに、天皇がどのような道筋を通り、どのようにして京都から吉野へ遷られたかの詳細については、十分には明らかでない。しかし、足利直義が十二月三十日付で河野通盛に送っている書下状<sup>②</sup>には、「廃帝御幸事、御座河内国東条之間、凶徒等可蜂起之由、有其聞」といい、また、明けて延元二年（北朝建武四年）正月二日付、同じく直義から紀伊の志富田兵衛太郎宛てた書下状<sup>③</sup>にも、

廢帝御坐河内国之間、凶徒可令内通于紀州之由、有其聞、早属畠山次郎、不日馳向、且構要害、差塞道々、且可誅伐凶徒之状如件、(國傳)

と述べており、後醍醐天皇が河内東条の楠木氏の許に在ることを告げている。尤も、天皇はこの頃すでに東条から大和に入り、吉野郡の賀名生を経て、十二月二十八日には吉野山に遷られていたようである。東条に近い河内国錦部郡内(現在、河内長野市)の天野山金剛寺に所藏される『釈論第十愚草末』の奥に、同寺の禅恵法印が手記した奥書に、「同(賀名生)(延元元年)十二月廿三日、帝王入御阿那宇へ、同廿八日吉野行幸給」と記されているのは、確かな記録とみてよい。また、その頃伊勢に在った北畠親房が、延元二年正月一日付で陸奥の結城宗広の許へ送った書状には、

抑主上出御京都、幸河内東条、即又復御吉野、為被果御願、可幸勢州之由被仰候也、天下興復不可有程、愚身於勢州、廻逆徒靜謐之計、可待申臨幸候、

とあり、ここで述べられている天皇の伊勢への臨幸のことは実現しなかったが、これらの諸文書の記事からして、後醍醐天皇が京都脱出後、果してどのような道筋を通られたかの詳細は不明であるが、ともかく、まず楠木氏の力を頼って、その本拠の地、河内の東条に至り、ここから楠木正行以下楠木一族らに護衛されて、金剛山地を越え、大和吉野郡の賀名生を経て、その年の内に吉野山に入御されたことは疑いない。

かくして延元元年の歳暮、後醍醐天皇の吉野遷幸によって、ここに南北兩朝分立の時代がはじまるのであるが、このとき楠木正行は、前述のごとく未だ十三歳の年少であったとしても、この若武者正行を頭領として、これを取り巻く南河内の楠木一統の力は、正成亡きあとといえども、なお、この時点で天皇が畿内地方第一の頼みとされる程のものを保ちつづけていたことが察せられるのである。

## 三

一方、この時期、畿内の南朝勢力楠木氏の一統と並んで、後醍醐天皇が、その戦力に大きな期待を寄せていたのは、陸奥国司北畠顯家に率いられた陸奥の官方勢力であった。天皇が吉野遷幸の直後、この顯家の許へ御自筆の勅書を送つて、南遷を告げるとともに、急ぎ官軍を率いて上洛するよう促されたのも、そのことの証であるが、顯家がこの勅命に応えて、結城宗広・伊達行朝以下陸奥の官方軍勢とともに、皇子義良親王を奉じて上洛の途につくことができたのは延元二年八月に入つてのことであつた。<sup>④</sup>途中、十二月下旬には、足利尊氏の嫡子義詮らの守る鎌倉を攻略し、明けて延元三年正月には東海道から美濃路、更に転じて伊勢・伊賀路を経て、二月下旬南都に入つたが、京都から南下した高師直ら足利方精銳の要撃に敗れて、顯家は更に転じて河内国に入つた。義良親王は、このとき顯家の軍勢と別れて、南都から吉野の父帝の許に赴いている。<sup>⑤</sup>

この頃、河内国内では、北畠顯家が陸奥を進発した延元二年秋の頃から、足利政権下で河内・和泉の守護職を承つていた細川顯氏の軍勢と、南朝方楠木の党との間で合戦がつづけられていた。そして一時は細川方の軍勢が楠木正行の本拠東条に迫るという事態もあつた。和田文書の、河内国高木八郎兵衛尉遠盛軍忠状によれば、<sup>⑥</sup>河内国丹北郡高木地方（現在、松原市の内）の豪族で有力な楠木党であつた高木遠盛は、延元二年七月頃から、近傍の八尾城・丹下城（丹南郡丹下郷、現在、羽曳野市の内）などで、細川方の軍勢と交戦しているが、十月に入つて、

同十月五日押寄八尾城、致数刻合戦、焼払彼城塙畢、同十九日為細川兵部少輔大將軍、引率所々凶徒等、寄来東条之間、於山城口、致随分合戦畢、

とあり、また、このとき細川方の軍勢の内に在つた田代了賢の軍忠状にも、<sup>⑦</sup>

同十九日、楠木赤坂御向之時、御敵数百人、山城東岸上懸出之処、其日軍奉行以梶田六郎、馳向彼凶徒等、可致

合戦之由蒙仰、勸一陣、自北方廻搦手、追落山城南城之凶徒等、焼払件城、自東岸之後押寄、責落御敵等之条、  
(下略)

とみえており、楠木氏の本拠東条の赤坂城も、細川勢の攻撃に、一時危急を告げるような状況もあった。

陸奥の宮方軍勢を率いた北畠顯家が河内国へ入ったのは、同国内でも、このような情勢が展開されていた時であったが、顯家の軍勢の入国に勢いを得た楠木・和田・高木ら河内・和泉の南朝方は、顯家の軍勢と協力して、延元三年三月には、河内から北進して摂津に攻め入って、同国天王寺に足利勢を破り、顯家の弟顯信の率いる南軍は、三月十日には京都の南、男山にまで進出するに至ったのである。<sup>⑤</sup>『官務記』によれば、「(三月)九日雨降、依天王寺没落、京中動乱、不能左右、恐怖無極者也」とあって、京都の動揺の様子がうかがわれる一方で、南朝側では、同年三月二十二日付で、肥後の阿蘇大宮司宇治惟時に対して、後醍醐天皇の勅が伝えられて、<sup>⑥</sup>

忠節之次第、委被聞食了、殊神妙、其堺事被憑思食也、(中略)奥州官軍、自去比、於南都・天王寺等、度々合戦、未決雌雄、相構此時分可被参上、然者可為別忠敷、

と、急ぎ上洛を促され、また陸奥白河の結城一族に対しても、五月八日付で綸旨が送られて、<sup>⑦</sup>「〔北畠顯家〕奥州国司参著之後、連々合戦最中也、以夜繼日、急可令馳参」と、急遽上洛、参戦すべき旨が伝えられている。更に『太平記』によれば、当時越前国に在った新田義貞の許へも勅書が送られて、越前の敵との戦いを差し置いても、急ぎ京都の征戦に進発するようにとの仰せがもたらされたと記されており、後醍醐天皇の、この一戦にかけた期待の大なるものがあったことが察せられる。

しかし結果は、この期待も空しく、北畠顯家は五月二十二日和泉国堺浦の合戦に討死し、<sup>⑧</sup>また北畠顯信らの占拠した男山の陣営も、七月十一日陥落して、南朝方の雄図は、ここに挫折したのである。このとき石清水八幡の社壇も炎上している。

かくして北畠顯家が討死をとげ、河内・和泉の南軍の活動も一頓挫したのち、閏七月二日には新田義貞も越前藤島の合戦で討死して、南朝を支える大きな力が相ついで崩れて行った情勢のもとで、足利尊氏は、八月十一日、北朝から征夷大將軍に補せられて、足利氏の幕府が名実ともに成立することとなる。次いで八月二十八日、北朝では建武五年の年号を改めて、暦応元年とした。尊氏の將軍職および北朝改元のこと、この時期に相ついで行われたことは、京都の足利方が、天下の形勢に今や大きな転機が来たことを確信するに至ったことのあらわれであったとみてよい。

このようにして南風漸く競わざるの感深い中で、明くる延元四年の秋八月十六日には、後醍醐天皇もまた吉野の皇居で崩御された。その前日の八月十五日に皇位は義良親王に譲られたが、この日、天皇は遺詔ともみられる綸旨を、諸方の官方將帥の許に送っている。このうち、その頃伊予の忽那島に在った皇子懷良親王（征西將軍官）を輔佐する五条頼元に宛てて送られた綸旨には、

自去比、依有御惱事、御讓国于陸奥親王了、不違日来之軍忠、可達叡旨、縱雖有不慮御事、深被憑思食之上者、

令勇官軍等、殊可廻朝敵追討之籌策、於当山者、云要害、云祇候輩、更不可有子細、存其旨、可下知軍勢等給者、  
天氣如此、仍執達如件、

とあって、義良親王への讓位のことを告げ、今後も新帝を輔けて朝敵追討の計をめぐらすべきことをいうとともに、南朝皇居の地吉野については、その要害堅固であることといい、また吉野の守りとして祇候する諸將士の忠勤といい、いささかも氣遣いはないと述べている。ここに吉野朝廷祇候の輩といわれている人々の中核として、当時最も信頼されるべき存在が、やはり河内の楠木氏およびその一統の勢力であったことは確かである。かくして延元四年八月、南朝第二代の皇位を継いだ義良親王、即ち後村上天皇は、このとき御年十二歳、楠木正行は十六歳の成年に達していた。



河内の観心寺文書に、延元五年二月二十三日付で、河内国小高瀬庄の領家職を御祈禱料所として同寺に寄進する旨の、後村上天皇の綸旨をうけて、楠木正行が、これを施行する国宣を發給し、その国宣に左衛門尉の官名が署名されているところから、少くとも後村上天皇治世下の早期に、正行が左衛門尉・河内守の官職を授与されていたことが確かである点については、先にも触れた。その後も、正行が河内の国守として發給した「左衛門尉」の署名のある国宣としては、河内国錦部郡の河合寺<sup>⑤</sup>所蔵の文書に、興国二年五月十六日付で、河合寺寺僧等中に宛てて、摂津国溝杭守里名（島上郡、現在、高槻市三島江付近）を御祈禱料所として河合寺に寄進する旨の、後村上天皇の綸旨をうけて、同五月二十六日付で、正行がこれを施行している国宣<sup>⑥</sup>、また観心寺文書に、興国三年正月十七日付で、河内国野田庄内（丹南郡、現在、堺市野田）の地頭得分を観心寺に安堵する旨を伝えた国宣<sup>⑦</sup>、正平二年十二月十五日付で、前掲の小高瀬庄の領家職を観心寺に安堵する旨を、再度、正行が伝えた国宣<sup>⑧</sup>などが残されている。更にまた、天野山金剛寺所蔵の文書の中には、左のごとき河内国司の庁宣がある。

#### 庁宣 留守所

可早令任先例、免除天野山金剛寺領所当以下国役臨時雜事、兼亦禁断煞生事、

右件寺者、靈驗殊勝之砌、禅侶精勤之場也、然者任建久二年宣旨・院庁御下文并庁宣等、永可免除四至内田畠山野等所当官物以下国役臨時雜事、兼亦可禁断煞生、若不拘制法者、慥可加炳誠之状如件、留守所宜承知、敢勿違失、故以下、

興国四年十二月 日

（楠木正行）  
守橋朝臣（花押）

とあって、河内国の国守が、同国天野山金剛寺領に、鎌倉時代建久二年以来の先例に従って、所当以下国役臨時雜事を免除し、且つ寺領内における殺生を禁ずる旨を、留守所に令したものであるが、署名の「守橋朝臣」は、河内守橋

朝臣であつて、花押は明らかに楠木正行のものである。この文書は、南朝の後村上天皇のもとで、河内守楠木正行が発給している国司庁宣としては、現存する唯一のものであり、且つ、正行が橘朝臣と称していたことの明証でもある。また興国五年五月の末に、河内観心寺の鎮守社が火災に罹ったことがあつた。観心寺文書に、興国五年五月二十六日付の楠木正行の自筆書状があり、

鎮守社壇回祿事、殊以驚歎入候、但神祇不焼失、火中御坐之条、末代之奇瑞、言語道断候、忝可經奏聞候、恐々謹言、

(通筆)  
「興国五」

五月廿六日

正行(花押)

観心寺々僧御中

とあり、この観心寺鎮守社回祿のことは、正行から直ちに吉野の朝廷に奏聞され、それに対して後村上天皇から、六月三日付で、

当寺社壇回祿事、奏聞之処、粉榆靈壇既雖及炎上、梅檀神祇猶令存火中之条、威験之至、叡感殊甚、早勵土木之功、宜專谿草之費者、天氣如此、悉之以状、

との綸旨が下されて、早速に神聖なる靈社を再建すべきことが仰せ下され、十二月には早くも新造の社壇が完成して、正行は、「頓作御造畢、無為御遷宮、返々目出度喜入候、必々可參詣候」と、また自筆の書状を観心寺へ送っているが、この造営は、恐らくは正行自身の助成によるものと思われ、河内東条に程近い観心寺と、楠木氏との深い關係をうかがうに足るものがある。そしてまた、これらの観心寺や河合寺・金剛寺などに残る一連の正行關係の古文書を通じて、後村上天皇治世初期の興国年間(一三四〇〜四六)以来、正行が、後村上天皇の厚い信任のもとで、河内の国守として、少くとも南河内地方一帯を、そのゆるぎない支配勢力下に掌握していた状況をも察することができる。

しかし、後村上天皇踐祚後の数年間、興国年中には、京都の足利政権に対する南朝方からの積極的な目立った軍事活動は、殆ど見られない。当時東国に在った北畠親房も、常陸の小田・関・大宝の諸城で、高師冬らの足利勢の攻勢のもとに、苦しい戦いをつづけていたし、西国では、征西將軍宮懷良親王が、この頃、伊予の忽那島から九州の薩摩に渡っているが、親王が肥後の菊池氏らと連携して活発な活動をはじめるのは、正平年間に入ってからである。ただ畿内地方で興国二年の頃、大和三輪地方の南党開住西阿の動きがやや活発であって、同年二月末から七月初めにかけて、河内・和泉守護細川頭氏が西阿鎮圧のために大和へ兵を進め、安部山（十市郡、現在、桜井市安倍）・河合城（広瀬郡、現在、北葛城郡河合町）・開地井城（城上郡、現在、桜井市戒重）などで戦いを交えているのが、わずかに目立った動きである。しかし、この西阿の活動も、七月二日開地井城が陥落して、西阿は、このうち河内東条の楠木氏の許に身をひそめたようである。

興国年間に南朝方勢力の活動が、このように比較的微弱であったことは、後醍醐天皇の崩御後、新帝は未だ幼少であり、且つ、元弘・建武以来宮方の中心をなした諸将も多く世を去り、これを承け継ぐべき次代の成長は、なお未熟であったことによるものであろう。しかし一方、京都の足利方の側にも、このような情勢下にあって、吉野の朝廷に對するはかばかしい動きが見られなかったことも注目されるところである。これには、河内・和泉の楠木・和田・橋本らの一統をはじめとして、開住西阿らのごとき南大和の南党、更には伊勢の北畠氏一統が、当時、京都回復のための積極活動を起すほどの力は未だなかったとしても、足利方の吉野への南下進攻を阻む守りとしては、やはり、たやすくはこれを破り難い勢力として存在していたためとみてよいであらう。

かくして、南朝では興国七年（一三四六、北朝貞和二年）の暮、十二月八日にまた改元が行われて、正平元年となつた。この正平の年号は、南朝の年号の中で最も長く、このうち二十五年、後村上天皇崩御の翌々年に至るまでつづくのである。

## 五

興国七年が正平元年に改められた年、後村上天皇は御年十九歳、楠木正行は二十三歳の青年期に達していた。一方、吉野の朝廷において天皇輔佐の中心ともなるべき北畠親房が、東国から吉野へ帰還したのも、この頃であったとみられている。南朝の中核をなすこの三者の間に、先帝後醍醐天皇の遺志成就のための籌策が、種々議せられたであろうことは察するに難くない。「正平」の年号も、正にその理想と決意を象徴するもののである。果して正平二年（北朝貞和三年）の秋に入って、楠木正行の活動は俄かに活発になった。和田文書の、和田助氏軍忠状によれば、

和泉国御家人和田藏人助氏軍忠事

（正行）

一、去正平二年八月十日、属故楠木金吾御手、於紀州隅田城合戦時、致軍忠畢、

一、同廿四日、河州池尻合戦時、同致忠節畢、

一、九月九日、於同国八尾城合戦時、致軍忠畢、

一、同十七日、藤井寺合戦時、致忠節畢、

とあって、和泉の南軍の中心である和田助氏は、河内の楠木正行の率いる軍勢に属して、正平二年八月十日には、まず河内東条から金剛山脈を越えて南下し、紀伊国伊都郡の隅田城（現在、橋本市隅田）の足利の党に一撃を加え、八月下旬には、また河内へ兵をかえして、東条の北西、丹南郡池尻（現在、南河内郡狭山町池尻）の足利方を攻め、九月九日には更に北へ進んで、若江郡八尾城（現在、八尾市内）を攻めている。

楠木正行に率いられた河内・和泉の南朝方軍勢の、このような攻勢に対処するために、足利氏の側では、河内・和泉守護細川頼氏および紀伊守護畠山国清を、南軍追討の将として急遽出陣せしめた。北朝の前左大臣洞院公賢の日記『園太暦』（貞和三年八月廿一日の条）に、

泉州凶徒事、飛脚到来、(細川)陸奥守頭氏取陣於天王寺之処、以外無勢、凶徒(乘)載勝、取来者、難治之間、今日向泉州堺浦、念可向勢之旨申之云々、驚歎不少、武家適施徳政時分、魔障不便事歟、

と記され、北朝側にとっては、ここ数年の間の一応の平穩の夢が破られた驚きと動揺の様子がうかがわれる。そして北朝では八月二十九日、天台座主尊胤法親王に命じて、延暦寺根本中堂において七仏薬師法を修して、南方合戦の戦勝を祈り、また幕府でも足利直義が、同じ八月二十九日、東寺へ御教書を下して、<sup>⑤</sup>「南方凶徒退治事、近日殊可被致祈禱精誠」と、南朝方追討の勝利を祈らせるなど、慌しい様相を示している。

このような情勢の中で、北進する楠木正行の軍と、南下する細川頭氏の軍は、九月十七日、河内の藤井寺(志紀郡)・教興寺(高安郡、現在、八尾市教興寺)付近において激戦を交え、細川方は多大の損傷をうけて敗走した。『園太暦』(貞和三年九月十九日の条)には、「今日聞、河州教興寺合戦、頭氏得理之処、凶徒(楠木方)入夜俄襲来、官軍敗績、多殞命、或又死生不分明之輩多之云々」と、足利方軍勢の敗北のさまを伝え、また中原師守の日記『師守記』(貞和三年九月十八日の条)にも、「今日聞、昨日於河内有合戦、佐々木大夫判官手物、多討死云々」と記されて、このとき足利方の一方の将として合戦に加わった近江守護佐々木氏頼の軍勢も大きな痛手を蒙り、氏頼の弟氏泰らも討死をとげている。<sup>⑥</sup>

一方、南朝の側では、九月二十七日付で肥後の阿蘇大官司恵良惟澄に宛てた後村上天皇の綸旨に、<sup>⑦</sup>「近国合戦事、所被申將軍宮也、得其意、近日殊可令致忠節」とあって、畿内における開戦のことが、九州に在る征西將軍宮懐良親王の許へまで告げ知らされた旨が述べられているが、そのとき將軍宮へ送られた天皇宸筆の勅書とみられるものが、五条家文書にある。<sup>⑧</sup>この文書は、日付も宛名も欠いているが、筆蹟は後村上天皇の宸翰とみとめられ、また内容からして、このときのものであることは確かであって、それには、

積鬱之処潜通、殊悦思給候、近国官軍既始合戦候、每度乗勝、時節到来候歟、其境事、于今無為承悦候、此時節

殊可被廻籌策候哉、頼元(五)・良氏等忠貞之至、感恩給候、(中略)理世安民之謀、只此一事候乎、随此界形勢、以專使可申候也、

と記され、畿内の戦況が今や南朝方の有利に展開し、正に足利氏追討の時節到来かと、大きな喜びと期待の思いが伝えられている。

京都の足利方では、このような藤井寺・教興寺合戦の頽勢を立て直すために、十月一日には、『師守記』に「今日山名伊豆守発向東条云々」とみえるように、当時伯耆・丹波守護で、足利方でも強剛の聞えの高かった山名時氏が、河内への援軍として派遣されているが、楠木正行は、十一月二十六日、この山名時氏と細川顯氏の連合軍を、摂津の天王寺・住吉辺に迎え撃って、これをも大いに打ち破っている。『師守記』(貞和三年十一月廿七日の条)には、「今朝聞、昨日於天王寺并住吉有合戦、自南方押来云々、軍勢悉引京都云々、多打死并被疵輩不知数云々、以外事也、為之如何」と記し、『園太曆』(貞和三年十一月廿七日の条)にも、この合戦の模様を記して、

今朝彼是云、昨日河州凶徒襲来、天王寺并堺浦合戦、陸奥守顯氏不及幾合戦、引退、前伊豆守時氏尽心力相戦、終舎弟両三人同所打死、時氏父子被疵、引退、武家辺騒動云々、

と伝えており、足利方の軍勢は、楠木勢の猛攻の前に、山名時氏・師義父子は傷を負い、時氏の弟兼義は討死し、細川顯氏に至っては、殆ど立ち向う気力もなく、惨敗して京都へ退いたのである。

この大敗に愕然とした京都の足利方では、急遽、軍勢を強化して、楠木勢の進攻に対応すべきことが議せられ、改めて、執事高師直および弟師泰を総大将とし、幕府の精鋭をすぐって、北上する楠木勢に当らせることとなった。『太平記』には、この頃の様子について、

サテモ今年兩度ノ合戦ニ、京勢無下ニ打負テ、畿内多ク敵ノ為ニ犯シ奪ハル。遠国又蜂起シヌト告ケレバ、將軍(氏直義)・左兵衛督ノ周章、只熱湯ニテ手ヲ濯ガ如シ。今ハ末々ノ源氏、国々ノ催勢ナンドヲ向テハ可叶共不覺トテ、

執事高武藏守師直・越後守師泰兄弟ヲ兩大將ニテ、四国・中国・東山・東海二十余箇国ノ勢ヲゾ被向ケル。と記している。

かくして十二月十四日、まず高師泰が進発し、次いで歳末に近い十二月二十六日には、高師直も京都を出陣した。『師守記』（貞和三年十二月廿六日の条）に、「今晩、執事武藏守師直発向南方、年内ハ於八幡越年云々」と記し、『醍醐地藏院日記』には、

（貞和四年）正月一日、天晴風静、去年十二月廿八日、（六）武藏守師直執事為令進発于楠木城、先下向八幡云々、其軍勢一万余騎云々、

と、京都を進発して八幡に着陣した高師直麾下の手勢は一万余騎と記しているが、『太平記』には、高師泰の手勢三千余騎、高師直の手勢は七千余騎、その他の諸勢を合わせて、足利方の総勢は都合六万余騎と記している。師直出陣の日に當って、足利直義は、京都の東寺および高雄の神護寺に御教書を下して、今日より三七箇日の間、大般若經を転読して「天下静謐の祈禱」を行ふべきことを令しているが、南朝の後村上天皇も十二月十七日、東寺へ綸旨を送り、

東寺御興隆問事、

後宇多・後醍醐二代御帰依叡志、至卓犖于前古、当代崇敬、豈不被逐芳躅哉、天下令一統者、可被果遂二代御願之上、猶宜被凝鄭重叡慮也、存忠節之輩、殊存其旨、可專御祈禱精誠之由、可令計談者、天氣如此、仍執達如件、と述べて、天下一統の時至らば、祖父後宇多・父後醍醐二代の叡志を継いで東寺を興隆すべきことを告げ、南朝のために祈禱の精誠を致すべきことを令している。また更に十二月二十六日には、大和の西大寺へも綸旨を賜わり、「天下太平御祈禱事、相触当寺并一門僧衆、殊可令致精誠給」と、戦勝を祈らしめており、この戦いに寄せる後村上天皇の強い期待の思いを察することができる。かくして、京都と吉野の正に雌雄を決すべき戦いを前にした緊迫した情勢の中で、正平二年（北朝貞和三年）は暮れたのである。

六

正平三年（一三四八、北朝貞和四年）の新春を迎えるとともに、兩軍は直ちに行動を開始した。『醍醐地藏院日記』によれば、「正月二日、執事立八幡、懸于河内路、進発東条城云々、但令逗留野崎辺云々」とあって、足利方の総大将高師直の軍勢は、正月二日に早くも八幡を出陣して、河内路を南下し、この日は野崎辺に逗留したとしている。野崎とあるのは、河内国讃良郡の野崎で、現在の大東市野崎のあたりである。三刀屋文書の諏訪部扶直の軍忠状にも、「預吉野退治御教書并守護御催促状、去正月一日馳参八幡、同二日付河内国佐良々著到」とあるから、正月二日に高師直の本軍が河内の讃良郡野崎のあたりまで進出したことは間違いない。

これに対して、楠木正行の軍勢については、『太平記』に、

師直・師泰ハ、淀・八幡ニ越年シテ、猶諸国ノ勢ヲ待調テ河内ヘハ可向ト議シケルガ、楠已ニ逆カ寄ニセン為ニ、吉野ヘ参テ暇申シ、今日、河内ノ往生院ニ著ヌト聞ヘケレバ、師泰、先正月二日淀ヲ立テ二万余騎、和泉ノ堺ノ浦ニ陣ヲ取ル。師直モ翌日三日ノ朝、八幡ヲ立テ六万余騎、四条ニ著ク。

と記して、正行の本軍は、河内路を北上して、同じく正月二日に、河内郡の往生院（現在、東大阪市六万寺町）を本営としたことを伝えている。この『太平記』の文中で、師直の八幡出陣を三日としているのは、前掲の史料からみて、二日の方が正しいと思われるが、また、その軍勢六万余騎が四条に着くと記している「四条」という地名の場所が、実は十分明確とはいえない。ただ、『太平記』のその後の叙述からみて、この四条が讃良郡内の野崎の近くであることは明らかであるが、河内街道ぞいには、讃良郡の南の、河内郡にも、正行の本営となった往生院のすぐ北にあたるところに四条村があり（現在、東大阪市四条町）、この河内郡の四条との区別が明らかでなく、吉田東伍氏は『大日本地名辞書』で、「四条畷」を河内郡の四条に擬定されている。しかし『太平記』の叙述の中に出てくる四条ないし



四糸繩手は、その記述の当否は別としても、讃良郡内であつて、恐らくは野崎の北方の北条（現在、大東市北条）の内あたりをさしているものようである。なお、このとき往生院に本營を構えた正行麾下の手勢は三千余騎であつたという。

かくして河内街道に対峙した楠木・高両軍の戦闘は、正月五日、河内郡往生院と讃良郡野崎の間の、生駒山地西麓の野において激しく展開された。この合戦の模様を『太平記』は事細かに伝えているが、その叙述にはかなりの粉飾が加わっており、大筋はともかく、一一の合戦の描写については、そのままにうけとることは勿論できない。しかし、この日の戦闘において、南軍楠木勢は、北軍足利方の大軍の前に、衆寡敵せず敗北を喫し、主將正行も遂に討死を上げたのである。

合戦の翌日、正月六日に、北朝の洞院公賢が、その日記『園太暦』に記しているところによれば、

今日聞、昨日武蔵守師直、為攻東条、自佐々羅、<sup>（讃良）</sup>攻向之間、東条軍勢襲来、合戦頗火出程事也、遂楠木帶刀正連<sup>（行）</sup>

并舎弟・和田新発等自殺、梟首・生虜少々将来、天下呼万歳云々、

と、この合戦の激しさを「頗る火の出る程の事なり」と表現し、そして楠木正行・正時兄弟および和田賢秀ら討死の事と、京都方勝利の喜びを書き記している。正行らの討死の場所については、同じく京都側の史料としては、足利直義が正月十二日付で、薩摩の島津貞久に宛てて送っている御教書に、

爰今月五日、楠木帶刀・同弟次郎・和田新発・同舎弟新兵衛尉以下凶徒数百人、於河州佐良々北四糸、所討留也、

此上吉野退治不可有子細之状如件、

と報じているのが注目される。この文中では、正行ら討死の場所を「佐良々北四糸」と記しており、それは讃良郡の内の北四糸ということであろう。ただし、この地名の正確な位置は、前述のごとく、十分明らかではないが、やはり郡内の北条のあたりとみるべきであろう。これに対して、南朝に関係のある側の史料としては、河内の天野山金剛寺

所藏の『釈論第十愚草末』の奥に、禪惠法印の手記した奥書に、  
 「正平三年<sup>大分</sup>戊子正月五日、於河内国四条、楠木帶脇左衛門正實<sup>足利</sup>、執事高武藏ニ被討了」と書かれているのも、注目される史料であるが、禪惠がここに記している「河内国四条」という記述も、それが讃良郡内か、或は河内郡の四条のことなのか、そのいずれとも断定することは難しい。今日、正行討死の伝説地として墓所の営まれているのは、もと讃良郡内の雁屋（現在、四条畷市雁屋南町）の地内であるが、一方、もと河内郡内である現在の東大阪市四条町の靈光院のあたりから、明治十九年頃発掘の際に、多数の人骨や武具が発見され、四条縄手の古戦場の一部と考えられて、ここに小祠が建てられ、明治二十二年に久邇宮朝彦親王の染筆になる「南朝忠臣瘞骨之所」の碑が建てられている。<sup>⑤</sup> いずれにしても、正行討死の場所が、はっきりと何処であったかを確定することは今や困難であるが、讃良郡・河内郡いずれかの内の四条の地が、この合戦の主戦場となったことは確かかといつてよいであろう。また、討死のときの正行の年齢は、前述のごとく、父正成討死の延元元年（一三三六）に十三歳であったとするのが正しいとすれば、この年、正平三年（一三四八）は二十五歳であったことになる。

## 七

いわゆる「四条縄手」の合戦が、かくして楠木勢の敗北に終り、主将正行も討死をとげたことは、南朝方にとって正に大きな痛手であったことはいふまでもない。合戦の翌日正月六日付で、大塔若宮興良親王が和泉の和田一族中に宛てた令旨に、

昨日合戦及難儀之条、所被驚思食也、此上弥存忠節者、可有抽賞、先念可馳参、有可被仰談之子細者、官將軍御気色如此、悉之以状、

とあり、また同日付で、同じく和田一族中に宛てた北畠親房の袖判のある御教書に、<sup>⑥</sup>「此間御下向当国候、昨日合戦

事以外候、就之、有可被仰談之子細者、急可被馳参之由、(親野)一品家仰候也」と述べられていることから、この敗戦が、興良親王や北畠親房にとっても大きな衝撃であつて、その対応策が慌しく協議されようとしている様子がうかがわれる。

しかし、前掲の島津家文書の足利直義御教書（正月十二日付）に、楠木正行等を討留めたことを記したのにつづいて、「此上は吉野の退治、子細あるべからず」と述べているように、幕府方の軍勢は、南朝方最強の楠木勢を打破つた勢いに乗じて、一挙に吉野へ向つて軍を進めた。まず和泉の堺浦に進出していた高師泰の軍勢は、『太平記』に、  
四条繩手ノ合戦ニ、和田・楠木ガ一族皆亡ビテ、今ハ正行ガ舎弟次郎左衛門正儀許、生残タリト聞ヘシカバ、此ツイデ次ニ残ル所ナク皆退治セラルベシトテ、高越後守師泰三千余騎ニテ、石河々原ニ向城ヲ取テ、  
とみえているように、和泉堺浦から河内東条に向つてゐるが、和田文書の和田助氏軍忠状に、

一、自同正月十四日、至二月八日、越州東条上時、(高師泰)両度合戦致忠畢、

一、同三月十八日・十九日、越州東条上時、(佐備)彼方左美谷口所々合戦、致軍忠畢、

一、同四月廿六日、天野二王山、越州責登時、随分致軍忠畢、

などとみえ、また田代文書の田代了賢軍忠状には、

凡自去年正月、至今年七月中、不退令経廻古市・石川御陣頭等、致昼夜御警固番役等、每度山攻、竭合戦忠節、  
(貞和四年)

楠木左衛門尉正行住宅以下、敵陣在々所々等焼払了、

とあつて、高師泰の軍勢によつて、一時は東条の楠木正行の館も焼払われるなどのこともあつた。しかし、このあたりでの攻防は、正月以後、断続してかなり長期にわたつており、師泰の軍勢は結局、東条周辺の南軍の活動を制圧し切れることは、遂にできなかったようである。

このように師泰軍が河内東条攻略に手を焼いている間に、一方、高師直の軍勢は、河内から大和川筋を大和路に入

つて、正月十五日には磯城郡平田庄に至り、更に二十五日飛鳥の橘寺を経て、正月二十八日遂に吉野山に攻め入って、南朝の皇居に火を懸け、藏王堂以下の吉野金峰山寺の諸坊舎をも焼払つたのである。

しかし後村上天皇は、高師直の軍勢の侵入に先立って、吉野の皇居を出御され、同じ吉野郡内の賀名生に遷御された。『太平記』には、師直の軍勢が吉野の麓に迫るとともに、天皇は四条隆資の奏上によって、御所を出御され、「習ハヌ道ノ岩根ヲ歩ミ、重ナル山ノ雲ヲ分テ、吉野ノ奥ニ迷入」、やがて「吉野ノ主上ハ、天ノ河ノ奥、賀名生下云所ニ、僅ナル黒木ノ御所ヲ造リテ御座」と記している。ところが阿蘇文書に、正平三年二月六日付で、後村上天皇が、そのころ九州の征西將軍宮の許に在った前中納言中院義定に宛てて送られた綸旨があり、それには、

抑去月五日河州合戦、官軍依失利、凶徒襲申吉野之間、当山要害難義非一、仍被改御坐、臨幸紀州候也、其後凶徒雖入彼山、衆徒堂衆郷人等致合戦、無程令追出畢、此間事、定驚遠聞乎、

とあって、この文言からすれば、天皇は吉野出御の後、一時、紀州の何処かに臨幸されたかのである。このことに関連する史料として、『醍醐地蔵院日記』（貞和四年正月卅日の条）に、「吉野帝御遷座于阿旦河入道城云々」との記事のあるのが注目される。阿氏河城のある紀伊国阿氏河庄（高野山領）は、有田郡の東部の山中であつて、東に大和の十津川地方と国境を接する地域ではあるが、距離的にやや遠隔に過ぎる感がなくもない。しかし賀名生の地も大和・紀伊の国境に近接したところであつて、天皇は吉野出御の後、恐らくは紀和国境のあたりを暫く所々経廻のすえ、結局、大和の賀生名に新しい仮りの皇居の地を定められたものとみるべきであらう。

このようにして、正月五日四条繩手において楠木勢が敗れ、主将正行が討死をとげると、その月の内に、一挙に吉野の皇居が攻め落される事態にまで及んだことは、吉野の前面の守りとして、正行の存在が、当時如何に大きなものであつたかを、如実に示したものだといつてよい。足利尊氏が二月十四日付で、豊後の大友氏泰の許へ書き送っている書状に、

くすの木うたれて候、よしのおひをとし候て、執事この月の十三日かへりまいりて候ほとに、きやうとハ、こと  
(楠木正行) (吉野) (高師直) (京都)  
くくしつまりて候、

と述べているのは、正行の討死、それにづく吉野の陥落という事態の展開が、京都の幕府側にとっては、正に天下  
静謐の時到来の思いであった様子を、よくうかがうことができる。その反面、南朝側にとっては、この時期、正行の  
死は、まことに何にもかえ難い最大の痛恨事であったに違いない。しかし南朝が、新しい皇居の地を、大和五条の奥  
の賀名生に定めたということは、この地は、攻めるに難い要害の地であることと同時に、五条から北へ金剛山地を越  
えれば、直ちに楠木一族の本拠たる河内東条に通ずる場所でもあり、南朝の皇居と、楠木氏の東条との連結を、一層  
緊密に保ち得ることが、また大きな理由であったと推察されるのである。

後村上天皇は、前掲の正平三年二月六日中院義定に宛てた綸旨の中で、河内の敗戦、吉野よりの遷幸を告げたあと、  
「然而御坐地堅確、為御籌策非無其利、且河州・和泉本陳無相違、宇陀・宇智・紀伊衆・勢州等御方、同以所致忠節  
也」と述べて、南朝の最も頼りとすべき楠木一統の河内・和泉の本陣は、今も堅く保持されており、宇陀・宇智郡な  
ど南大和地方や、更には紀伊・伊勢などの官方武士たちも、なお忠勤を励んでいると、今度の敗戦にも決して挫折す  
ることのない、南朝方勢力の力強い団結を誇示しているのである。そして事実、この後村上天皇の治世のもので、こ  
のち二十余年、正平年間を通じて、楠木正行の残された弟正儀をはじめとする河内・和泉、更には南大和・紀伊・  
伊勢などの畿内南軍を中心に、また広く全国的な規模においても、南北朝時代の中で、南朝勢力が最も活発な活動を  
示す時期が展開されるのである。

#### 註

- ① 『太平記』卷第十六「正成下向兵庫事」の条。(日本古典文学大系本、以下同じ)。
- ② 同、卷第十六「正成首送故郷事」の条。
- ③ 同、卷第二十六「正行参吉野事」の条。
- ④ 同、卷第二十六「賀名生皇居事」の条。

- ⑤ 「観心寺文書」延元五年四月廿六日、楠木正行国宣。なお小高瀬庄は河内国茨田郡内で、現在の守口市高瀬のあたりにある。
- ⑥ 「観心寺文書」延元五年二月廿三日、後村上天皇綸旨（観心寺々僧等中宛）。
- ⑦ このあたりは現在富田林市の内。
- ⑧ 『諸家文書纂』所収「河野文書」建武三年十二月卅日、足利直義書下状。
- ⑨ 「志富田文書」建武四年正月二日、足利直義書下状。
- ⑩ 「天野行宮金剛寺古記」（大阪府史蹟名勝天然紀念物調査報告書、第六輯）所収。
- ⑪ 「結城文書」延元二年正月一日、北畠親房書状写。
- ⑫ 「楓軒文書纂」所収「白川文書」（延元元年）十二月廿五日、後醍醐天皇宸筆勅書写。
- ⑬ 「阿蘇文書」（延元二年）九月十一日、参議某奉書写（阿蘇大宮司館宛）。
- ⑭ 「太平記」卷第十九「青野原軍事、付、囊沙背水事」の条、『元弘日記裏書』など。
- ⑮ 「和田文書」延元三年十月日、高木遠盛軍忠状。
- ⑯ 「田代文書」建武四年十一月四日、田代了賢軍忠状（細川顯氏証判）。
- ⑰ 「田代文書」建武五年三月廿六日、田代了賢軍忠状（細川顯氏証判）。「大國魂神社文書」延元三年三月日、國魂行泰軍忠状など。
- ⑱ 「太平記」卷第十九「青野原軍事、付、囊沙背水事」の条。
- ⑲ 「官務記」（『大日本史料』第六編之四、延元三年三月八日の条所収）。
- ⑳ 「阿蘇文書」（延元三年）三月廿二日、後醍醐天皇綸旨写。
- ㉑ 「結城古文書写（有造館本）」（延元三年）五月八日、後醍醐天皇綸旨（白川一族等中宛）。
- ㉒ 「太平記」卷第二十「宸筆勅書被下於義貞事」の条。
- ㉓ 「神皇正統記」後醍醐天皇の条。『元弘日記裏書』。「太平記」卷第十九「青野原軍事、付、囊沙背水事」の条。
- ㉔ 「諸家文書纂」所収「三刀屋文書」建武五年七月十八日、諏方部信恵軍忠状。「小早川家文書」建武五年七月十四日、逸見有朝軍忠状。『元弘日記裏書』。「太平記」卷第二十「八幡炎上事」の条。
- ㉕ 「五条家文書」（延元四年）八月十五日、後醍醐天皇綸旨。
- ㉖ 河合寺の所在地は、河内長野市河合寺。
- ㉗ 「河合寺文書」興国二年五月十六日、後村上天皇綸旨、および、興国二年五月廿六日、楠木正行国宣（広瀬大夫法眼御房宛）。
- ㉘ 「観心寺文書」興国三年正月十七日、楠木正行国宣（観心寺寺僧中宛）。
- ㉙ 「観心寺文書」正平二年十二月十五日、楠木正行国宣（和田左衛門尉宛）。

③① 「金剛寺文書」 興國四年十二月日、河内国司（楠木正行）庁宣。

③① 「観心寺文書」 興國五年六月三日、後村上天皇編旨。

③② 「観心寺文書」 （興國五年）十二月一日、楠木正行自筆書状。

③③ 「田代文書」 暦応四年九月六日、田代頭綱軍忠状（細川顯氏証判）。同、暦応四年十月十一日、田代基綱軍忠状（細川顯氏証判）。『天野文書（前田家本）』 暦応四年七月日、天野遠政軍忠状など。

③④ 「和田文書（色川本）」 正平七年六月日、和田助氏軍忠状（楠木正儀証判）。

③⑤ 洞院公賢は、この翌年、貞和四年十月二十二日に、任太政大臣。

③⑥ 『園太暦』 貞和三年八月廿九日の条。

③⑦ 「東寺文書（五常之部）」 貞和三年八月廿九日、足利直義御判御教書（東寺供僧中宛）。

③⑧ 「佐々木系図」（『統群書類従』第五輯下、系図部所収）。

③⑨ 「阿蘇文書」（正平二年）九月廿七日、後村上天皇編旨写（恵良小次郎館宛）。

④① 「五条家文書」 後村上天皇宸筆御書状（切紙）。

④② 『太平記』 卷第二十六「正行参吉野事」の条。

④③ 『師守記』 貞和三年十二月十四日の条。「田代文書」 貞和五年七月日、田代了賢軍忠状（高師泰証判）。

④④ 『太平記』 卷第二十六「四行参吉野事」の条。

④⑤ 「東寺文書（御宸翰千字文）」 貞和三年十二月廿六日、足利直義御判御教書。「神護寺文書」 貞和三年十二月廿六日、足利直義御判御教書。

④⑥ 「東寺文書（御宸翰千字文）」 正平二年十二月十七日、後村上天皇編旨。

④⑦ 「西大寺文書」 正平二年十二月廿六日、後村上天皇編旨。

④⑧ 「諸家文書纂」 所収「三刀屋文書」 貞和四年二月十三日、諏訪部扶直軍忠状（佐々木高氏証判）。

④⑨ 「太平記」 卷第二十六「四条繩手合戦事」の条。

④⑩ 「島津家文書」 貞和四年正月十二日、足利直義御判御教書。

④⑪ 「天野行宮金剛寺古記」（大阪府史蹟名勝天然紀念物調査報告書、第六輯） 所収。

④⑫ 「校岡市史」 第三章第二節「中世中期の校岡の南北対立」 参照。

④⑬ 「和田文書」（正平三年）正月六日、興良親王令旨。

④⑭ 「和田文書」（正平三年）正月六日、北畠親房御教書。

④⑮ 『太平記』 卷第二十六「賀名生皇居事」の条。

④⑯ 「和田文書（色川本）」 正平七年六月日、和田助氏軍忠状（楠木正儀証判）。

④⑰ 「田代文書」 貞和五年七月日、田代了賢軍忠状（高師泰証判）。

④⑱ 「園太暦」 貞和四年正月廿日、廿六日、二月三日の条。『東金堂細々要記』。『斑鳩嘉元記』。『太平記』 卷第二十六

「芳野炎上事」の条。

⑤ 『太平記』卷第二十六「芳野炎上事」・「賀名生皇居事」の条。

⑤ 『阿蘇文書』正平三年二月六日、後村上天皇綸旨写。

⑥ 『南北朝遺文』九州編、第三卷所載「大友文書録」(貞和四年)二月十四日、足利尊氏書状写。